

まち医者 コザを駆ける！



コザ漫遊国

2010年8月7日、まち医者として生きた1人の医師が脳血管障害で急逝した。

東大医学部を卒業し、脳神経外科を専攻し、東大病院や米国国立衛生研究所、北京のに中日友好医院へ留学するなど研究者としての道を歩みながら、故郷コザに戻り、まち医者としての道を選択した源河茂医師である。

本書は、彼の足跡を伝え、彼の活動を継続していこうと、地域の人たちが作った自費出版書「まち医者 コザを駆ける！」の一部を再編集したものである。

デイゴホテル社長 宮城 悟

「僕たちの先輩に現役で東大医学部に行った者がおる！」

コザ高校3年生に進級したての春、確か担任の先生だったかそんな事をのたまっていた。・ 験年のスタートの大切な時期に、僕達の・ 験生としての意識を喚起し発奮させようとの魂胆だったのだろう。校歌に謳われる『自由の学園』を曲解し、ただひたすら学園生活を楽しむ事だけに全精力を集中する低偏差値集団の我々には、あまりにも偉大すぎて実感を伴わない話題であった。

しかし、その伝説の人物像は〈バケモノ的天才〉〈辞書を食う人〉〈歩きながら参考書を読む〉〈全琉模試で2位になり悔し涙を流す〉などと、まことしやかに後輩たちの間で語り継がれたものであった。

それから20数年後。その伝説的天才と僕はひょんなことから出会い、意気投し時々酒を酌み交わすようになった。キャリアとは裏腹に朴訥で地味な印象をけるが、実は話し好きで聞き手のフツのオジサンであった。

興に乗ると延々と明け方近くまで話し込む事もなくなかったが、その多岐にわたる旺盛な好奇心と知識と深い洞察力には度々感心させられ舌を巻いた。さらにいつ覚えたのか英語はもちろんの事、韓国語、中国語も堪能であった。

「父は52歩でこの地に開業し地域医療に殉じた。以前から心に決めていた事であるが、ちょうど私も同じ年齢に達したので、父の跡を継ぎかかりつけ医として地域に根を張り、皆様のお役に立ちたい。」

伝説の男、源河茂氏は幼少の頃から高校まで過ごしたこの町で開業する理由をそう語った。

余談であるが、先代の源河朝康院長も地域の人々に赤ひげ先生と慕われて、鬼籍に入った今でもその功績は年輩の方たちの間では話題に上る。さらに、彼の関心は医療のみにとどまらず地域の街づくりにも向かう。役所主催の公聴会や委員会では臆する事無く持論を展開し人が中心の街創りを訴え、たくさんの人の共感をた。そして漫遊国の建国に尽力しその議長に就任。以後の活躍は衆目の知る所なのでここでは敢えて書かない。

常に物事に対して思考が多面的で奥深く理路整然としており、納得するまで妥協を許さない。誰よりもこの街を愛し憂え、いい意味での批判的精神、協調性も同時に持ち、わせる数少ない人の一人であった。

かくいう僕は源河医院のお、意様？のひとりで、叩けばホコリが出るメタボなカラダに潜む数多くの疾病を、先生によって撃退し鎮静させて頂いた。僕の最大の天敵、痛風は治療の甲斐あってこの数年鳴りを潜め、現在に至っても僕の足関節に悪さをすることもなく血圧も安定気味だ。又、他の病院の専門医に紹介する際にはひと回り近くも後輩の僕の事を「僕の友人なのでよろしく」と必ず電話を一本入れてくれた。診療時のあの無愛想でこむずかしい顔からは想像もできないくらい人が良いのである。

いずれ我々も先生の住む黄泉の国へ行くことになるだろう。しかし、ここはひとつかかりつけ医の教えを守り、なるべくしぶとくこの世に留まっておきたい。その時が訪れたならば、先生のご高説を賜り、鋭い批判とシニカルな笑みを着に、一献やりたいものである。

音楽と外国語のまち

コザの街にはいろいろな音がある。
朝早くからスズメやハトの鳴き声が聞こえてくる。

街を歩いていると英語、中国語、韓国語、フィリピン語などを耳にする機会も多い。琉球民謡、演歌、ロック、ジャズなどの多彩な音楽が流れ、「音楽の街」をつくろうという息吹が感じられる。

パークアベニューとパルミラ通りを散歩している時、あるイギリスのことわざが頭に浮かんできた。

L e t e v e r y b i r d s i n g i t s o w n n o t e

(一羽一羽すべての鳥に自慢の歌を歌わせよ)」

一人一人の個性や才能を発揮して生き抜いていきなさいという意味であろう。近くのインターネットカフェに入り、このことわざを検索してみた。玉川大学の学生センターの入り口に、このことわざが学長直筆の英文で書かれているそうである。個性を尊重するというイギリスのよき伝統を、継いでいるのだろう。

コザの街には音楽家と外国人が多い。沖縄の他の地域にはない異国風景がある。先ほどの鳥のように、いろいろな音を出して人々は生きている。

街角で外国人と話をしてみた。一見、とっつきにくい人と思っていたが、話をしてみると愉快的気分になった。「開けゴマ！」(O p e n s e s a m e !) という言葉の意味がわかるような気がした。異文化をもった者同士が言葉というカギで心のとびらを開くことができたのである。

コザには音楽と外国語という知的資源がある。この二つをうまく活用すれば、地域ブランドを創り出せるという居酒屋談義が盛りだくさんになってきている。これからどのような音がコザの街の中にあふれてくるのか、楽しい夢が広がっていく。

(琉球新報 2006年1月16日掲載)

韓国語を話してみた

「アンニョンハセヨ！」と言っただけでコーヒーが一杯タダになる店が、コザのパルミラ通りにある。私が初めてこの店を訪れた時、韓国語を話したら韓国人のママさんは飛びあがるように喜んだ。

「ウリマル（私たちの言葉だわ）」。

そこで、この1年間、私はこの店で韓国語を話すようにしてみた。すると、おもしろいことに韓国語を話すウチナンチュ、ヤマトンチュ、アメリカ人が集まってきた。

そして、毎週土曜日の夜に韓国語学習会が開かれるまでになった。このメンバーでカラオケに行った時に、ウチナンチュの一人は、韓国人も顔負けするほど韓国の歌がうまかった。私も韓国語で歌い、チョアヨ！（いいぞ！）という黄色い声のとびかって、カラオケは大いに盛り. 上がったのである。

韓国語は、日本語と語順がほとんど同じなので非常にとっつきやすい。意味や発音も似ているものが多い。たとえば、感謝しますは、カムサハムニダという。カムサは日本語の感謝である。あの奇妙な文字をしたハングル文字は、舌、口、. の形を表現した発音記号である。1週間もあれば文字を覚えられ、3カ月もすれば簡単な日常会話はできるようになるだろう。

日本では外国語教育というと、今でもまだ英語が中心である。小学生から英語を教えるという動きもある。一方、アメリカでは外国語教育に力を入れてこなかった。そのため異文化を理解できなかったとの反省がなされている。

これからは異文化の理解のために英語だけでなく、他の外国語も必要なのであろう。まず、コザの街で韓国語も話してみませんか。（琉球新報 2006 年 1 月 30 日）

コザのまちアリンクリン

■エイサーを見た

「エイサー、エイサー、スリサーサー」というかけ声、「トゥンテントウンテン」というテンポの速い、線の音色、指笛、大地にひびきわたるドンドンという太鼓の音、青年の力強い動きを見ると、体の中に躍動するリズムが伝わってくる。歌と踊りのリズムがストレスで疲れた脳をリセットしてくれるようだ。（2006年8月24日）

■歩きたくなるような街づくり

沖縄は車社会のため歩かないことが肥満の原因のひとつだといわれている。肥満の解消のためには「歩きたくなるような街」をつくる必要があると思う。そこで、「歩いて暮らせる街づくり」について調べてみた。

高齢者でも自宅から歩いて往復できる範囲に商店街、医療機関、学校、文化・娯楽施設などがあり、自家用車に頼らない交通体系が整備されていることが、その要点だという。

交通体系を整備する方法として路面電車の導入はよいことだと思う。階段の昇り降りが必要でなく、バスに乗るような感じで乗れるのがよい。また、バスと違い、定時に発車するのが大きな魅力である。

ゴヤ十字路の武道橋を撤去し、オープンカフェをつくるという構想がある。オープンカフェには階段のいらぬ路面電車が似あうかもしれない。（2006年9月1日）

■コザクラの交流

コザのパルミラ通りに「コザクラ」というカフェバーがある。ここには、インターネットの情報を頼りに日本各地から若者や定年退職前の団塊の世代の人たちが集まってきている。

地元に住むウチナンチュも大勢出入りしており、コザクラはウチナンチュとヤマトンチュの交流の場となっている。

また、アメリカ人や韓国人も訪れており、外国語を気楽に話せる雰囲気がただよっている。そうしたなかで、観光、歴史、音楽などいろいろな事について、酒を飲みながらごやかに語りあうのが、「コザクラの交流」である。この交流のなかから「コザ漫遊国」が誕生し、コザの情報を全国にむけて発信しているところである。（2006年9月18日）

■コザの1マイル

沖縄では肥満の人が多く、全国と比べて急性心筋梗塞と糖尿病のリスクが高くなっている。そして、「長寿の島」というブランドがあやういと言われている。脂肪の採りすぎ、夜型社会で夜遅くまで飲食すること、車社会で歩かないことなどが肥満の誘因になっているようだ。満解消のために、まず、てっとり早い運動は歩くことだと、コザの街を歩きながら考えた。

パークアベニュー、コザゲート通り、国道330号線で囲まれた一角（コザスクエアとも呼ばれていたと聞いたことがある）には、いろいろな店がある。この一角のウィンドーショッピングをするだけでいい運動になるのではないか。

ひとつの通りが約400mなので、1周すれば約1600m、1マイルになる。「コザの1マイル」と呼べるかもしれない。現在、ミュージックタウンが建設中であるが、ここからコリンザまでをぶらぶらと散策するという人の流れが生まれてこないものだろうか。そのためには、どんなソフトが必要か、検討してみる価値があると思う。（2007年1月10日）

■パークアベニューの歩行者天国

3月17日（土）アイルランドの最大の祭り、セント・パトリックス・デーを祝って、沖縄市の中央パークアベニューでパレードが行われた。普段は閑散としている通りが、上野のアメ横を思わせる人出でごったがえしていた。このようにぎわいは、10年ぶりくらいだという。

パークアベニューは、約450mで、マニラヤシを中心とする植栽で景観がととのえられつつある。また、パークアベニューにはユニークな店が数多くある。車を店の前に乗りつけて買い物をするスタイルがこの通りにふさわしいのだろうか、この種の議論は結論がでていない。

ただ、先日のにぎわいからすると、アベニューへの車の進入をシャットアウトすれば、公園の雰囲気を楽しむ買い物客も増えるかもしれないと考えてみた。（2007年3月19日）

■街に広場

3月29日（木）、沖縄市センター区の評議員会がセンター自治会で開催された。保健所跡地をどうするかについて市役所から派遣されたコンサルタントに地域住民が要望を述べた。その要望にもとづき、コンサルタントが企画書をまとめるという形式で会議が進められた。以下、問題点と対策について住民の意見を列挙してみる。

(1) コザの街は、「音楽の街」をめざしているが、昼間は人をひきつけるような音楽が日常的に流れてはいない。夜になると、「民謡酒場」、「ライブハウス」等でいろいろな音楽を楽しむことができる。しかし、昼間は訪れる観光客に対し、「ここは夜の街だから夜来なさい」と言っているのが正直な現状であろう。

昼間にさりげなく沖縄の、線の音色が流れてくるような場を設定したほうがよい。高額な金のかかる建物はいらぬ。沖縄市の「ふるさと園」のような平屋の民家を建て、そこに住民が三線などをもちこみ、自然発生的に曲をかなでるのがよいのではないか。住民のやすらぎの場ともなるであろう。西洋音楽は、ミュージックタウンで行われるので、保健所跡地は、沖縄の伝統的な音楽の流れる空間にしたい。

(2) 子供たちが自然にたわむれながら自由に遊べる場所が「コザの街」

保健所跡地を大きな広場にして子供たちが伸び伸びと遊べるようにしたい。保健所跡地は水はけが悪く雨のあと水たまりができる。かえって、そこに子供たちが集まってきて、アメンボなどをながめている。昆虫も集まるような緑の空間と地面がほしい。

また、広場ができれば、中国での太極拳のように、朝から空手などの伝統武術を子供たちが学ぶことができるであろう。

(3) 「コザの街」は良きにつけ悪きにつけアメリカ人をはじめとする外国人とつきあっていかないといけない。ただ、夜に来る外国人と昼に来る親子連れの外国人には大きな違いがある。夜に来る外国人に対しては監視カメラの設置も検討されているくらいである。

昼間に来る親子連れの外国人でにぎわった先日のセントパトリックスデーのパークアベニューを参考にするとよい。大学院大学の研究者も訪れてきて、国際交流の華が開いたといえる。保健所跡地に広場ができれば、中国の公園のような状況が生まれるかもしれない。中国の公園では外国人を見るとよってきて外国語の練習をしたりするという。「コザの街」に「国際交流広場」を期待したい。（2007年3月31日）

■街の図書室

コザの街には昼間、人の流れがないのが悩みの種となっている。そこで考えてみる。コザの街の中に市立図書館の「分館」を作ってみたらどうだろうか。かつての琉米親善センターの図書室のように朝9時から夜9時までオープンすれば、文化情報にふれたい人や勉強する子供でにぎわってくるであろう。

コザには楽しいイベントが多いが、日常的に人をひきつける工夫のひとつとして「街の図書室」をおすす

めしたい。(2007年5月21日)

■歩きたくなる街

沖縄は、日本のなかで肥満者の比率がワーストだといわれています。肥満者の増加により急性心筋梗塞や糖尿病が増え、早世率(全死亡に占める64歩以万の死亡の割合)が全国に比べ高くなっています。肥満の原因のひとつに、「車社会」の沖縄で深刻な運動不足があげられます。歩かないと足腰が弱くなり、筋肉量が低下し、消費されるカロリーが減少します。肥満になると体を動かすのが面倒になり、ますます太るようになります。

この悪循環を断ち切るためには、「歩きたくなるような街」づくりが必要だと思います。コザの街には商店街、銀行、郵便局、診療所などが歩いていける距離にまとまって存在しています。ミュージックタウンも完成真近です。

パークアベニューはマニラヤシで景観をととのえており、パルミラ通りには、「ヒストリート」という戦後文化資料室があります。ヒストリートの「しーぶん館」が6月7日にオープンの予定です。そこで、空き店舗を利用して市立図書館の「分館」を作るなどすれば、散策するのによい街になるのではないのでしょうか。(2007年6月6日)

■サルサとは？

サルサはラテン音楽の一つです。カリブの島キューバやプエルトリコ発祥のダンス音楽に、ジャズ、ソウル、ロックなどの要素がとり入れられています。1970年頃までにニューヨークで確立され、その後、米国の東海岸、西海岸、中南米、ヨーロッパ、日本など世界中に広まったとのこと(フリー百科事典)。

また、サルサとは、ラテンアメリカで料理に使われている調味料のことです。スペイン語でソースの意味で、ラテン語の塩からきているそうです。サル(Sal)は、ラテン語で塩の意味です。野菜に塩をふりかけて食べたものをサラダといい、給料をサラリーといったような派生語があります。生命にとって欠くことのできないものとしてサル(Sal)があるようです。

踊りのサルサと塩はどういう関係にあるのか。コザの銀天街で居酒屋談義といきたいものです。(2007年6月15日)

■セミと梅雨明け

「セミの初鳴きが梅.明けだ」と去年6月、沖縄タイムスの「茶のみ話」に照屋俊子さんが書いておられた。昨日、コザのセンター公園でセミの初鳴きが聞こえた。梅.明けとしてよいのかもしれない。今日は抜けるような青空だ。

さあ、セミの活動と連動するかのように、コザの街にもいろいろな音があふれてくることだろう。(2007年6月20日)

■開院3年、建国1年

3年前の今日、7月2日に医院をオープンして、ちょうど満3年たちました。地域の皆様のご支援で、何とかここまでやってこれました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

コザは私の育ったところであり、いろいろな面で地域に貢献したいと考えております。ミュージックタウンの完成も間近で、これを起爆剤にしてコザが活性化されることを期待しながら、街を散策しています。コザは「歩きたくなる街」になっていくような気がしています。

さて、コザ漫遊国は建国して1年たちました。コザ漫遊国の活動により、さまざまな文化交流ができたことを喜んでおります。コザの名物のひとつは、団塊の世代のオジさん達が、熱く、今、語る、「居酒屋談義」だ、と私はひそかに決めています。この談義のなかから、コザを活性化する新たなソフトを開発し、現実の場で使ってみたいものです。(2007年7月2日)

■開院3年、建国1年祝賀会

7月7日(土)に源河医院のサプライズ3周年記念パーティ、コザ漫遊国建国1周年祝賀会を開催していただき、ありがとうございました。

父の医院を改装し、12年ぶりにシャッターをあげてから3年の月日がたちました。地域の皆様のご支援に深く感謝いたします。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

沖縄の肥満問題の解決策のひとつとして、玄米粥でやせるという栄養学者の小柳達先生の方法を私は紹介しています。パーティの席上、玄米をいただきありがとうございました。

コザ漫遊国は、建国1周年をむかえましたが、自由闊達な国民に議長がひっぱられているという国情です。コザ漫遊国の活動とコザクラの交流は、異文化間コミュニケーションに貢献していると感じられるようになりました。今後さらに発展して、コザが文化交流の拠点になることを願っております。(2007年7月9日)

■セミの大合唱

コザのセンター公園では、朝5時頃からセミが鳴いている。今年は例年よりセミの声が大きいような気がする。

午前8時頃、パークアベニューを武っていると樹木にセミが止まって鳴いていた。7月27日のミュージックタウンのオープンにむけてセミも応援しているのだと考えてみた。(2007年7月24日)

■エイサー

コザミュージックタウンの広場でエイサーを見た。躍動するリズムが体の中を熱くかけぬける感じがする。これから土、日の夜9時には、各地の青年会が広場でその雄姿を披露することになっている。コザの街は、コザ市が誕生し、第1回の全島エイサーコンクールが開催された1956年のような雰囲気になってきたようだ。(2007年7月30日)

■エイサーの街

8月31日、午後7時から9時まで、ミュージックタウンを囲むように道ジュネーがあった。コザゲート通りは車をシャットアウトして歩行者天国状態、国道330号線は片側通行となっていた。

コザゲート通りから中の町中通り、国道330号線を回遊するエイサーを追っかけた。1キロほど歩いたと思う。さわやかな疲労感でよく眠れた。(2007年9月1日)

■コザの街の本因坊

9月2日、第53期沖縄本因坊戦があり、宮国利一さんが11年ぶりに3度目の優勝をはたした。宮国さんは、23才の時に本因坊になって後、40年間も沖縄の第一線で活躍されている。現在、沖縄市室川でNPO法人「清楽」を主宰しており、私はときどき指導を受けに行っている。コザの街に本因坊がいるということは、囲碁愛好者にとっての誇りである。(2007年9月10日)

■パルミラの風

10月1日、午後7時から9時まで、パルミラ通りでアメリカン・ジャズ・コンサートが開かれました。大盛況でした。パークアベニューからゲート通りに抜けるようにさわやかな風が吹いていました。風にのるようなジャズの音色を楽しみながら、あちこちで交流の輪が広がっていました。

パルミラ通りは車が入れず、また道幅も6メートル位なので、集まって話をするには人と人との距離が

ちょうどよい具. だと思います。赤レンガの道とまわりの樹木で景観も整えられています。

そして、アーケードがないため空が見えます。ジャズのはじまる前に、黒雲の一団があらわれてきたので、一抹の不安がよぎりました。最近、沖縄では、空に寒気があって突然大雨が降る（いわゆるカタブイ）のが多発しているからです。幸い今日は降らず、爽快な気分になりました。（2007年10月2日）

■熱帯夜は続く

夜間の最低気温が25度以下. の夜を熱帯夜と呼んでいる。お彼岸も過ぎたのに沖縄ではまだ熱帯夜が続いている。しめきった部屋では室内は30度にもなるようだ。

そこで問題になるのが睡眠だ。人間の体温は、夜ねいりばなに下がってくるのだが、こうも暑いと体温が下がらず寝つけなくなってくる。暑さ対策に扇風機を使っていて、夜になるとびっしょり汗をかき、その後調子が悪いという方が当院を訪れている。

寝汗をかくのはよくないだろう。クーラーの設定温度を28度にして朝までつければ、寝冷えをしなくて朝すっきりおきられるのではと考えている。（2007年10月10日）

■アクションフォーラムに参加して

10月20日（土）、コザのまち活性化アクションフォーラムが沖縄商工会議所で開催された。結論から言うと、まちの活性化のためには市民が情報を共有すること。そのためには、気軽に集まることのできる拠点を中心市街地に作ることだということだった。

これまで郊外に流れていった人を呼びもどすために中心市街地に公共施設をもってくる試みは、各地で行われつつある。日常的に人が集まるように、一番街に図書館と集会場を作るという提言を百人委員会で検討していると言う古堅さんの話で希望が持てた。（2007年10月22日）

■国のない男

現代アメリカを代表する作家、カート・ヴォネガットの「国のない男」を読んだ。アメリカの奴隷時代に、奴隷所有者の自殺率は、奴隷の自殺率をはるかに越えていたらしい。奴隷たちの絶望の対処法は、ブルースの演奏と歌だった。一方、白人の奴隷所有者には、それがなかったというのがおもしろい。

沖縄は、基地問題、経済問題によるストレスが多い。その中で、歌や踊りを大事にして、絶望せず生き抜きたいと思う。（2007年12月3日）

■もちつき大会

1月13日（日）、午前10時から、センター自治会と子ども会育成会共催の新春親子もちつき大会が開かれた。子どもから老人まで80名あまりが参加した。センター区という商業地域で老若. 女が朝から集まり地域住民の交流が図れるのは喜ばしいことだ。コミュニティ（地域社会）がまだ生き残っているという感じがする。（2008年1月18日）

■まちの活性化のための提案

1月18日（金）、市中心市街地活性化シンポジウムにパネリストとして参加しました。「まちなか居住でまちの活性化」がテーマでした。私は、主に二つのことを提案しました。

（1）空き店舗に図書館を

一番街の建物（マルゴ）というデパートが空き店舗となっていますが、ここを改装して図書館の分館を作り、朝9時から夜9時まで、祝祭日も開館することです。そうすれば、親子づれで本を読む人が集まってきます。図書館の中に集会所を設けて、子供からお年寄りまで集まれるようにしたらよいでしょう。

図書館には、リサイクルコーナーを設けていらなくなった本を提供してもらい、必要な人にはもっていつでもらうのです。図書館を中心として一番街の中で古本市を定期的にやれば、沖縄の各地から人びとが集まってくることでしょう。

(2) 保健所跡地の公園化

保健所跡地は、アスファルトでおおわれた地面を開放し、緑豊かな広場にして、沖縄の子どもの国にあるような沖縄の民家を移設するのがよいでしょう。広場で遊び、民家の中で、線をひいたり、碁を打ったりして、世代間の交流ができます。

これからのまちづくりは商売が先ではなく、住民にとって居心地のよい生活空間を作ることです。車社会の弊害で悩む沖縄にとって「歩きたくなるような街づくり」はひとつのキーワードです。最後に、大型の公共工事にならないようにして、人材育成の面に資金を投入するという観点が大事だと思います。(2008年1月21日)

■報告会

2月1日(金)、沖縄市の中心市街地活性化についての報告会が市役所で開催されたので参加しました。中心市街地に必要なのは、人々が心地よく過ごせる「居場所」があること、歩いて暮らせる街づくりだ、と改めて感じました。

大型のショッピングセンターでは売っていない魅力が、中心市街地にはあります。それは、人々の交流から生まれる文化です。スタジオ解放区、モグコザの若者の活動は、中心市街地に再生の息吹を伝えていると思いました。(2007年2月2日)

■歴史の散武道

きのうは久しぶりの快晴だったので、尚宣威王の墓のあたりを散歩してみました。尚宣威王は尚円王の弟で、その墓はコザの地(越来)にあります。尚泰久、尚徳、尚円、尚宣威という四代の王も若い頃は越来で活動していたのです。散歩しながら琉球史について考えてみるのもいいものです。(2008年3月3日)

■G I N T E N G A I 4 4 を 見 て

コザの街は、セントパトリックスデー、アノコザ、銀天街屋台祭りなどイベントがメジロ押しです。3月15日(土)、銀天街で銀天座のミュージカルG I N T E N G A I 4 4 を見ました。古い街によそから若者が住みつき、古くからの住民との葛藤の中で新しいルールを作っていくという筋でした。若者たちが実際に銀天街で生活し、演劇まで、演ずるようになったことに感動しました。(2008年3月17日)

■墓周辺のごみ撤去

尚宣威王の墓は、コザにある。比謝川のほとりで、大きな岩を利用して作られている。亀甲墓は、18世紀に中国から伝わったもので、岩を利用した墓が沖縄の墓の原型といわれているようだ。尚宣威王の墓は琉球の歴史を考えさせるのに重要だと思う。

残念なことに墓の周辺には、丈法投棄された粗大ごみが目立った。3月18日、沖縄市のクリーン指導員ら約百人が粗大ごみをトラック、台分も片付けたと、25日の琉球新報で報道されていた。コザの街の基底には越来の古い文化があると古堅さんはいつも熱く語っている。ごみの丈法投棄はやめてほしい。歴史・文化を大切にする街でありたいものだ。(2008年3月26日)

■たかが野球、されど野球

沖縄尚学が春の選抜高校野球大会で優勝した。本当におめでとう。沖縄のチームがボロボロになって負けていたのを思うと隔世の感がある。九回裏の負というのもあった。東海大相模の原選手（現巨人軍監督）にホームランでひっくり返されたのも苦い思い出だ。そんなトラウマも若人の活躍のおかげでもう治った。沖尚の皆さん、精進して、この感激を夏にも伝えてくれ。（2008年4月5日）

■清明（シーミー）ぶっくい

沖縄は今、清明祭のシーズン。先祖の墓に親戚一同が集まり、墓の掃除、焼香、お供えものをして、先祖の供養と親戚間の交流が行われている。きのう、「シーミーぶっくい」という言葉を始めて聞いた。雨でもなく、晴れでもなくどんよりとした天気のことをいうようだ。シーミーの時には、雨が降らないか心配になる。

朝9時頃、雨が激しく降っていた。どうなるかと思っていたが、10時頃にはやんだ。昼12時には晴れ間も出てきた。沖縄各地で清明祭が無事行なわれ、喜びの輪が広がったことであろう。（2008年4月14日）

■沖縄方言

沖縄方言Tシャツで「いちやればちよ一でー」、「なんくるないさ」などがよく売れているという。私は、「てーふあーやっさー」という言葉にひかれた。これは、「冗談が多い、面白い人だなあ」という意味である。ストレスのなかでユーモアを忘れないウチナンチュの心意気が感じられた。

この「てーふあ」は、中国語で大話（ダーファ）と書く。中国人の話が大きいのに感心した琉球人が「てーふあーやっさー」と言ったかもしれないと考えてみた。（2008年4月19日）

■囲碁とまちづくり

5月17日、銀天街で屋台祭りがありました。カネボウ広場では囲碁が自由にできるという古堅さんの言葉につられて広場にいきました。そこで玉城満五段にバツタリ出会い三子置かせてもらい対戦しました。さすがに玉城さんは芸が細かく大敗しました。局後の検討で、ハネるところをハネずに形が悪くなったとの指摘に納. しました。

去年も沖縄の本因坊になった宮国利一六段がみえて、子供たちに囲碁のルールを解説していました。石は呼吸して生きているが、呼吸点がなくなると死んでしまい盤. から. り. げられる。置いてはいけない禁止点があるなど、たくみな話芸で聴衆をひきこんでいました。

ところで、広島県の因島（いんのしま）は本因坊秀策の出身地で有名ですが、囲碁によるまちづくりの基本構想がうち出されています。沖縄には囲碁愛好者が多いので、銀天街も囲碁が加わることによってさらに活性化すると思います。（2008年5月19日）

■チャーリータコスの朝

夜の街と言われるコザは、朝の人通りが少ない。ただ、マニラヤシとブーゲンビレアで植栽を整えているパークアベニューでは、散武を楽しんでいる人が増えてきているようだ。パークアベニューは、450メートル位で歩く距離としては手ごろで、広い歩道があり車にさえぎられることもない。白いアーケードが武道をおおっており、沖縄の熱い日差しをさえぎっているのも人気の秘密かもしれない。

日曜日の朝10時頃、パークアベニューを散武して、創業52年のチャーリータコスに立ち寄り、コーヒーを一杯飲みながら、社長の勝田氏と街について語りあうことがある。車社会のために沖縄の人が武かなくなり、肥満が問題になっていることが話題になった。コザの街は店の目の前に車を止めるのではなく、共同駐車場に止めて、いろいろな店を散策できるのが利点だということで意見が一致した。

その時、チャーリータコスには観光客が大勢訪れていた。四人連れに来店の理由を尋ねたところ、昔から来ていてなじみだから友人を誘った、という。創業 52 年のブランド力はさすがだとあらためて実感した。(2008 年 6 月 2 日)

■コザ文学賞、阿川大樹、D 列車

6 月 14 日 (土)、コザクラで小説家の阿川大樹氏と懇談する機会があった。阿川氏はコザ文学賞の審査員で、コザをよく訪れるリピーターである。コザを舞台にした小説の構想を練っておられるようである。阿川氏の小説はこれまで読んだことがなかったので、図書館で「D 列車でいこう」という本を借りて読んでみた。

広島県にある山花鉄道の再建問題がテーマになっている。山花鉄道は年間 3000 万円の赤字を出している。この鉄道を存続させようと、50 代の男 2 人、30 代の女 1 人が 2 億 8 百七円もの自己資金を投入し、ドリームトレインという株式会社を設立し、奪斗する物語である。

鉄道再建のために、1 親バカ大作戦として山花鉄道の構内で子どもの絵を展示 2 無名の山花鉄道と有名な山花楽器 (両者は本来、縁もゆかりもない) をくっつけたイベント (山花レイルウェイ・バンド・コンテスト) の開催、3 農家のトキばあさんに列車内での販売に一役かっってもらう 4 運転士養成講座を開き、講座修了者を山花鉄道の社員にして列車を運転させる 5 浜松の平和テレビがイベントと山花町の日常生活を報道するなど、あの手、この手のアイデアを実践し、成功しているところがおもしろい。(2008 年 6 月 20 日)

■ミュージックは爆音に勝つ

8 月 1 日 (金) は、ミュージックタウン音市場で 1 周年記念イベントでした。ダイヤモンドの歌とギターで盛り上がり、ラテンの軽快なリズムに乗って踊っている人が大勢いました。

音市場でお会いした琉球新報中部支社の慶田城さんからおもしろい話を聞きました。ホールの中はジェット機の爆音と同じ音量とのこと。同じ音量なのに一方はいやがられ、一方は喜んで踊り出す。コザは音楽の面ではすばらしいことをやっているのだから自信を持ってほしいと励まされました。ミュージックタウンもこれからが正念場です。いろいろ改善して頑張りたいと願っています。(2008 年 8 月 2 日)

■越来グスク

11 月 6 日、沖縄市城前公民館で亀島靖先生の「越来グスクを語る」という講演を聴きました。沖縄では学校で琉球の歪史を教える時間がなく、自らのアイデンティティを確立できず自信喪失に陥ることがある。そこで、地元の歴史を深く知っていけば自信が湧いてくる、と亀島先生は語っていました。

越来にどうして城があったのかということから話が展開されていきました。1450 年代という緊張感の高い時期に思いをはせてみましょう。尚泰久、阿麻和利、護佐丸、鬼大城などの将が活躍していた頃です。

沖縄の地図を見てみましょう。平野部で、本島を横断する線としては、残波岬と勝連半島を結ぶ距離が最も長くなっています。この線の中央が中山の越来であり、当時の琉球で最も盛えていた農耕地帯です。中山は城の多いところで、越来城の他に勝連城、中城城、座喜味城があります。越来城は、3146 坪あり、沖縄で城の大きさではベストテンに入っています。越来城は交通の要所にあり、各大将を監視する重要な役割があったため国王の息子達が派遣されていました。

尚巴志の第..の尚泰久は青年時代、越来城で過ごし首里に上がったあと、現代に通用する「七国津梁」の国策を実行しています。越来城で尚泰久は、後に、第二尚氏の創設者となる金丸を部下に、また、阿麻和利の妻となった尚泰久の娘、百度踏揚は越来城で生まれています。

越来の地は、いろいろな勢力がしのぎを削る場であったのです。講演を聴き、パワーをもらったような

気がしました。(2008年11月7日)

■ワナキオとチャンプルー

ワナキオという芸術家の集団がある。オキナワを並びかえて集団の代表名としたものである。コザの銀天街でフォーラムがあった。オキナワがワナキオになるのに、さまざまな議論があったことを聞いた。

そこで、アナグラム (Anagram) という遊びのことを思い出した。文字を並びかえて言葉を作る遊びである。創造とは無から有を作り出すのではなく、既存の要素から新しい組み合わせを作り出すことだと言われている。ウチナーグチで言えば、チャンプルーであろう。いろいろな素材を組みあわせ、それぞれの特性を失うことなく新しい味を作るのである。オキナワから生まれたワナキオの活躍を期待している。(2008年11月24日)

■宮国チーム初優勝

12月20日、第一回オール沖縄囲碁団体戦で宮国利一六段の率いる「あさひ運転代行チーム」(沖縄市)が優勝しました。宮国六段は、コザの銀天街で子どもたちに囲碁を教えています。この優勝が銀天街の子どもたちにも大きな励みになることでしょう。(2008年12月22日)

■祝賀会

1月22日(木)、町田まりさんと森口康秀さんの結婚を祝うパーティーがコザクラで開かれました。御結婚おめでとうございます。

イイニービチデービル。

Congratulations on your marriage, Mari and Mori !

祝賀結婚。

キョルホン、チューカハムニダ (韓国語)。

シャディーキバダイホー (ヒンディー語)。(2006年1月23日)

■第23回倉敷音楽祭に参加して

倉敷は江戸時代の家並みを今に残す整然とした美観地区が魅力的で、多くの観光客でにぎわっていました。沖縄と10度もの温度差のある静寂な空気がエイサーの熱波で一変するような感じでした。

サーターアンダギー、ソーミンちゃんぶるー、沖縄ソバの店の前には長蛇の列ができ、そして、「完売」という朱色の文字がさん然と輝きました。

交流コーナーでは、沖縄の文化に関心のある方や県人会の面々が見えて、有意義な「ユンタク」となりました。音楽祭は多くの観客が訪れ、大成功だったと思います。このようなイベントを体験する機会を与えてくださった関係の方々に感謝致します。(2009年3月23日)

■南の島のフリムンを見て

ゴリ主演、監督のこっけいな映画だった。パークアベニュー、ゲート通りが舞台になって物語が展開されている。身近な風景が新たな切り口で描かれていておもしろい。

アメリカ人ダンサーをめぐるゴリと黒人が安慶名の闘牛場で決闘することになるが、おもしろいからやってみるとダンスホールのマダムがウチナー口で語るのは迫力がある。ゴリの決闘のために、術の達人(平良とみさん)が登場。奇想天外な訓練の成果で、ゴリが勝利したのには思わず笑いがこみあげてきた。この映画をみて、ロケ地のコザを訪れる観光客が多くなることだろう。(2009年8月31日)

私の中国語（我的中文）

8月に沖縄県医師会報に「私の中国語」という題で文章を発表することになっています。これは、私が中国語を勉強しはじめた状況について書いたものです。

医局に一人の台湾人がやって来たのがきっかけでした。最初は英語で話をしていたのですが、ある日、これじゃいかんと思いました。アジア人同士が英語で交流しているのが奇妙に感じられたからです。そこで、中国語を勉強することにしました。

大変残念なことに彼は交通事. でこの世を去ってしまいました。彼の同僚から彼はもはや人の間にはいないという手紙を受け取りました。

ご冥福を祈っています。

八月我在沖縄県医師会雜誌. 發表"我的中文"。這篇文章写我開始學習中文的情況。

在医局里来了一个台湾人是我說中文的開端。首先我們用英文交談、可是有一天我覺. 這個是丈行。因為我們是亜州人、用英文交往很奇怪。所以開始學習中文。

很遺憾的是由於交通事. 他去世了。他的同学給我写信告訴我他已經丈在人間。我祈禱他的冥福。（2008年7月19日）

私の中国語

コザの一番街から路地に入ったところに台湾料理店「凱莎琳（キャサリン）」がある。毎月20日になると、この店で私は中国語を話すメンバーと会話を楽しんでいる。

中国語を話しはじめたのは、22年前のことだった。大学の医局に台湾の高雄から留学してきた脳外科医、孫民先生とつきあったのが中国語を学ぶきっかけとなった。

当時、私は腫瘍グループに属しており、実験と治療成績の調査で忙しかった。脳腫瘍細胞を培養して抗癌剤を投与し、フローサイトメーターという機械で細胞周期を解析していた。

また、悪性脳腫瘍に対する化学放射線療法の効果を検討していた。コンピューターソフトを開発して患者のデーターを入力し、生存率を計算していたのである。

そんなある日、医局に行くとき孫先生が一人イスに座ってボーとしていた。どうしたのかと尋ねてみると、留学はしたものの、見学ばかりでエネルギーが余ってしょうがないと言う。猫の手も借りたかった私は、「じゃあ、一緒に脳腫瘍の統計の仕事しましょう」と誘った。

それからというもの、夜の12時頃まで二人で病歴室にこもって、カルテを調べてデーターを入力する日々が続いた。孫先生は日本語が話せないので、英語で意思疎通をはかっていた。

ところが、ある日、私の脳裏をひとつの疑問がよぎった。アジアの若者同士がこのまま英語で話をしていいのだろうか？そこで、頭を切り替えた。いい機会だから、いつそのこと中国語を教わってしゃべってみようと思ったのである。

まず、finish を中国語で何と言うのかと聞いてみると、完了（ワンラ）という教わった。そして、英語と中国語の混ざりあった奇妙な会話が始まった。たとえば、私、行く、あした、大学にといったような語順もリズムも正しくない中国語である。

彼は「私の中国語」を聞くなり、大声で笑いながら答えた。中国語はflexible（柔軟）だから言いたいことは百パーセントわかると。これに気を良くした私は、ああだこうだとしゃべっていった。

時々、孫先生が正しい中国語に直してくれた。そうしているうちに語順もリズムも正しくなっていたような気がする。

中国語と英語の飛びかう入力、計算の日々の結果、乏突起神経膠腫の生存率に関する解析ができた。こ

れを孫先生が論文にまとめ米国の雑誌 *Neurosurgery* に投稿したところ、めでたく受諾されて祝杯をあげたのは、楽しい思い出である。

その後、私は大学からの派遣で、北京の中日友好医院で共同研究をする機会が与えられた。孫先生の指導のおかげで、中国人との会話を楽しむことができた。

ところが、ある看護師に「あなたは中国語がうまい。だけど南方の老人のようななまりがあるねー」と言われてしまった。その時、私はからかわれたような気がしたが、「今の中国の指導者は小平だ。彼だって南方の老人じゃないか」と自分を慰め、その後も中国語会話を楽しんだ。

北京出張後、留学の機会を得た米国でも帰国してからも孫先生とは中国語で手紙のやりとりをしていた。しかし、しだいに二人とも臨床の仕事で多忙になり、文通がいつしかとだえていた。

2004 年に開業した後、久しぶりに孫先生に挨拶状を出した。すると本人ではなく、同僚から手紙が来た。「他不在人間」と記されていた。

彼は 5 年前に交通事故で亡くなり、もはやこの世の人ではなく、人（世間）にはいないということであった。

中国語は flexible と「私の中国語」を励ましてくれた孫先生のご冥福を祈っている（2008 年 9 月 5 日）

多文化共生のまちで

■コザの街で中国語

コザの一番街から路地に入ったところに、凱莎琳（キャサリン）という台湾料理店がある。そこでは、半年前から「中国語を話す会」が開かれている。毎月20日、午後8時からである。食事をして酒を飲みながら、中国人、台湾人と会話をしていると世界が広がってくる感じがする。

中国語で、まず覚えたらよい言葉は何かと聞かれたら、私はチーフアン（吃飯）だと答える。チー（吃）は食べる、ファン（飯）はごはん、チーフアンは「ごはんを食べる」という意味である。

外国人と食事をしながら会話をするのは、コザの街にふさわしい外国語の勉強法であると思う。中国語を話したい方、中国文化に興味のある方はどうぞいらしてください。（2006年9月1日）

■新たに中国語講座を開設

沖縄市は、今年3月より無料の外国語講座をコリンザで開始している。英語、スペイン語、韓国語の講座が開設されている。

10月より新たに中国語講座が開かれることになった。週2回、月、水の午後6時半より8時半までである。10月9日（月）は、体育の日で公休日であるが、講座を開くとのことである。中国と沖縄は、歴史的なつながりが深い。そのために、沖縄には中国語ファンが多いように思われる。

講師は中国人の楊健女史である。中国人女性の声は1オクターブもの変化があり、心地よいリズムが感じられるといわれている。中国語講座で学んだ人が、コザの街で中国語を話すことになるかもしれない。

中国人や台湾人との交流の輪を広げてくれるのではないかと期待している。（2006年9月9日）

■ヒジャイヌーディー

音痴を中国語で何と言うのか、中国人に聞いてみた。「ツォーサンツ」だと言う。直訳すると、左ののだという意味になる。何のことはない、ウチナーグチ（沖縄方言）でいう「ヒジャイヌーディー」ではないか。方言には、おもしろい中国語が入りこんでいるものだと感心した。（2006年11月14日）

■韓国語でカラオケ

12月12日、コリンザの韓国語講座で学んでいる人たちの忘年会に参加してみたら、12名中9名が女性であった。韓国語を勉強するきっかけとして「冬のソナタ」など韓国ドラマの影響が大きかったことを参加者はくちぐちに語っていた。

カラオケになると、韓国の演歌から民謡まで、いろいろな歌がとびかった。かなり歌いこんだ人が多く、大いにもり. かった。韓国の演歌は、日本の演歌とかなりリズムが似ていると思う。少年期を釜山で過ごした古賀政. 先生の影響も大きいのかもしれない。

また、日本の第一線の歌手には、美空ひばり、都はるみ、橋幸夫など韓国の血を引いた人が多いといわれる。韓国の歌を通して韓国語を学んでいけば、日本の演歌と同じように頭にすっと入っていくかもしれない。（2006年12月13日）

■インド人とユンタク（雑談）

パークアベニューに「インド屋」というインド直輸入の雑貨店がある。インドの洋服や飾り物、財布などが整然と並んでおり、お香のかおりが立ちこめ、異国情緒をかもし出している。最近、店主のビクターさんと、通りすがりによく雑談する。このあたりのインド人は日本語が本当にうまい。街角でインド人ともあれこれ話をしながら買い物ができるのは、大型ショッピングセンターにはない、コザの魅力のひとつだと思う。（2007年5月29日）

■An American Bartender

On June 2, when I visited Kozakura, there was an American bartender.

We could enjoy English conversation with him.

Kozakura may be a suitable place for cultural exchange. (2007年6月3日)

■エイサーを中国語で何という？

7月20日、キャサリンで「中国語を話す会」が開かれた。中国人6名、ウチナンチュ8名が集まり盛り上がった。沖縄市は、2007年6月13日にエイサーのまち宣言をしたが、エイサーは中国語で何というのか、宣言というのは中国語でそのまま使っているのかと、話題になった。2007年6月13日、沖縄市宣布把沖縄市建成传统鼓舞的城市。という訳がよいだらうと教えてもらった。

エイサーを伝統的な太鼓と踊りと訳しているが、エイサーという音をそのまま使った中国語訳ができるものだろうか。たとえば音色の発音は、インサーでエイサーに近いが。エイサーの訳として音色はどうだろうか。造語能力の高い中国人の研究を期待している。(2007年7月21日)

■ソムチャイ開店1周年

8月6日、パルミラ通りにあるタイ料理店ソムチャイで開店1周年の記念パーティが開かれた。パーティは7時からで、一人でも客が来るやいなや飲食が始まる。日本本土では、パーティの前にはビールがぬるくなると陰口がたたかれる挨拶を聞かなければならないこともある。

ここ沖縄では、まず飲食、次に挨拶というパターンで、日本本土から来た人は一種のカルチャーショックを.けることがあるという。ただ、アメリカや中国でもパーティは、まず飲食だったと個人的体験を思い返すのだが。

ソムチャイの料理は、こうばしい香りとhot and spicyな味でアメリカ人に受けていて連日大勢のアメリカ人の客を目にする。

オーナーのリチャードさんの友人の友人がニューメキシコ州から沖縄に遊びに来ている。昼は首里城、美ら海水族館に行くが、夜になるとコザのアイリッシュパブなどで交流を深めるという。ソムチャイで更に交流の輪が広がった。

Congratulations on 1-year anniversary of SomChai!

ソムチャイ、開店1周年おめでとうございます。(2007年8月7日)

■中国へ墓参り

11月2日より5日まで、親せき5名で、中国福建省に行きました。先祖のお墓が琉球墓園内に移転されたので、墓の前でお祝いをするためでした。墓前にお花、お酒を供え、「うちかび」を焚き、線香をあげ、一人が.線を弾くなかで、「かぎやで風」を四人で踊り、最後に、「ていんさぐの花」を歌いました。沖縄県の関係者、中国への留学生、墓の管理人、中国人学生が参加してくれて、感激しました。

1718年、接貢船の才庫官として琉球館で亡くなった源河朝忠の墓を中国の方が大切に保存してくれたことに感謝致します。中国と琉球の間には、長い交流の歴史があります。これから沖縄と中国の交流がますます盛んになることを願っています。(2007年11月7日)

■建設の息吹

パークアベニューでアメリカのピザ家屋(ピザカヤ)が建設中である。オーナーはスティーブさんで、沖縄在住20数年とのことで日本語もうまい。もともと溶接工だったので建設工事はお手のもの。毎日12時間ほど内装工事をしている。アメリカのカントリーハウスのような木目調の店が徐々にその姿をあらわしてきた。

居酒屋にひっつけたピザカヤというあたりユーモアのセンスもある。パークアベニューの名店になるだろうと期待している。(2008年10月6日)

■インド人の智恵

認知症の検査法として日本で広く用いられているものに長谷川式簡易知能評価がある。そのなかに、100から7を順番に引いてください、というのがある。93 - 7でつまづく認知症の人は多い。そこで、私は患者さんにインド人の智慧について話をすることにしている。

- 7というのは - 10 + 3だと頭をきりかえたらよい。93から7を直接ひこうと無理をせず、まず10をひいて、後で3を足すという楽な方法をとって見たらどうか。86という数字が自然にでてくるのではないだろうか。

こういったことをインド人は日常的にやっている。引き算を簡単な足し算に変換する方法である。マイナスをプラスに転化するポジティブ思考とは具体的にこういうことなのかと感心させられる。

最近、パークアベニューにあるインド屋のビクター氏とインド式計算法について話しあった。2桁の掛け算などもマジックのような方法があって興味はつきない。(2009年1月6日)

■ペルー料理の店がオープン

パークアベニュー郵便局の通りにティティカカというペルー料理のレストランができました。ティティカカとはペルーとボリビアにまたがる世界でもっとも高い所にある湖(標高3800メートル)のことです。ボリビア生まれのウチナンチュ、ルイスヒガさんがオーナーです。

店内では南米帰りのウチナンチュのスペイン語が飛びかっており南米の雰囲気を楽しめました。(2009年11月11日)

半径500メートルの原風景

古 堅 宗 光

(コザ漫遊国副議長／コザサポーターズクラブ世話人／NPO コザまち社中幹事)

旧源河医院は、木造瓦葺きの、そんなに大きくはないが風情に溢れた建物でした。入口の木々の緑が涼しげで、およそ病院らしからぬたたずまいでした。木の床の、付も診察室も、.の映画に出てくる情景そのものです。先生（先代）も街のお医者さんそのもので、どこか恐そうでいて、そのくせ親しみやすいおじさんという感じでした。

僕はそんなに何回も診察を、けたというわけでは無いのですが、うちの親父や親戚には絶大な信頼をされていた。おそらく、ゴヤ育ちの人間にとって、源河医院は幼い頃の原風景そのものだと思います。

その源河医院に生まれた漫遊国議長の源河先生が亡くなられてから、ちょうど一年です。その機会にあらためて考えてみました。

源河医院の半径500メートルのコザ、そこに先生の原風景がある様な気がします。生前よく口にしてた言葉の数々、想いの数々が浮かびます。先生の出身校のコザ小学校、その隣、現在の市民会館、八重島公園辺りは琉球政府の農林試験場でした。広大な、地に広がる緑と色んな種類の作物。戦後沖縄の農業に果たした役割はそれこそ大きなものでした。試験場の向かいには、桂林を思わせる石灰岩の無数の奇岩が連なっていました。その景観のどれもが今は跡形も無く、記憶だけが残っています。

そして、源河医院のすぐ隣には、琉球政府立中央病院、コザ保健所。その二つの施設には、豊かな緑、芝の広場があったと思います。近隣の子供たちにとっては、試験場とともにかっこうの遊び場所でした。また第二ゲートから諸見にかけては、クービ、野イチゴなどの木の実の宝庫。コザの子供は野山を駆けめぐっていたのです。

しかし又一方、基地の街の厳しい現実とも向き合わされます。源河医院のすぐ隣のセンター通りは、アメリカ人相手の丈夜城の街です。沖縄各地からたくさんの人たちがなだれこんで来ました。その中には、過酷な現実押し潰されそうになりながらも懸命に働く多くの女性の姿もありました。

おそらく先代の源河先生も町医者として、彼女たちを数多く診てきたことでしょう。そしてそのかたわらに小学生、あるいは中学生の源河先生もいたかもしれません。

とにかくコザは基地に囲まれた街でした。センター通りの裏、今のデイゴホテル辺り、くすのき通りからコザ中学校一帯、そして、今の中の町、諸見、もちろん嘉手納基地。旧コザはまさに基地に四方八方囲まれていたのです。

その中で小学から高校までの多感な青春を生きてきた世代。たくさん基地被害、戦闘機、爆撃機の墜落事、そして婦女暴行殺人、タクシー強盗殺人、等々。圧倒的なアメリカの物量、文化に押し潰されそうになりながらも、自らの出自を考えざるをえない世代。

コザの人間の風変わった精神構造、それはこの時代の申し子ゆえなのかもしれません。一年忌を迎えた源河先生のここ数年の言動を理解する上でのキーワードもその中に潜んでいるのかもしれません。

医学部を目指しての猛勉強、そして国費医学生として東大へ。それは永久に記憶に残るコザの伝説です。

そして、晩年の突然の帰郷、開業。町医者としてコザに生きる覚悟、色んな葛藤もあったことでしょう。

しかし、その覚悟も、やっぱり半径500メートルの原風景の記憶、そして現在の500メートルの現実の中に見出していたのかもしれませんが。今あらためて源河先生の事を考える時、僕にはどうしてもその思いが強くなります。

今日は旧盆の迎え火の日。ゴヤの街角のどこかで、東京から帰って来た源河先生の姿をみることもあるかもしれません。

いえ、半径500メートルの範囲の何処かにいるはずです。

あらためて合掌……

源河先生の思い出

花 城 可 雅

(コザ漫遊国閣僚／コザサポーターズクラブ世話人／はなしろ小児科院長)

源河茂先生が唐に旅立たれて早くも1年を迎える。訃報は突然、8月の焼け付くような日にもたらされた。10日ほど前、コリンザで開催されたキジムナーフェスタのフィナーレで大勢の関係者の中から先生のお姿を見つけて、その成功に祝杯を挙げ来年もコザ漫遊国として、援しようと話をしたばかりであった。

私にとって先生との最も懐かしい思い出は、2009年3月春分の頃、岡山県倉.市主催の音楽祭にコザ漫遊国が、聘され、共に現地に行った時の事である。沖縄市から東青年会による「エイサー」演舞や琉球民謡のステージが、また、うるま市から現代組踊り「肝高の阿麻和利」が上演されることになっていた。われわれコザ漫遊国は、会場周辺の特設テントで、沖縄そば、サーターアンダギー、タンカンなどの沖縄特産品の物販を行うことになっていた。

東門市長も当日式典の挨拶があり前日から倉.市に入っており、前日の結団式、倉.市懇親会にもご参加いただいてメンバーの士気は一層上がっていた。そのような雰囲気の中で先生と私は、一抹の丈安はあったが(二人とも物品販売をした経験がない)、皆と同様に物販の最前線で声を張りあげて愛想をふりまく心構えでいた。

しかし案の定不安は的中した。当日の会場で私たちは、予想外に大勢の来客とその活気に圧倒されて、他のメンバーの汗だく奮闘する姿をよそ眼にスゴスゴと第一線から撤退し材料保管テントの番人に下がってしまった。沖縄市役所のY課長(当時)も畑違いにもかかわらず、声を枯らして物販に励む姿をみると、私たちはますます小さくなった。

話はこれで終わりではない。私たちには更なる、劇が待っていた。10時30分頃から開始した物販が軒並み好調で、特に沖縄そばの売れ行きが凄く1時間ほどで初日販売予定数の400食に達する勢いで売れていた。沖縄そば担当のNさん(銀天街青年部長)から「あと50食で今日は終了にするので行列を切ってくれ」と指令が出た。暇なのは先生と私しかない。

私たち2人はお昼前で200人はいたかという長蛇の列に割って入り、事情の説明とお詫びをして引きとってもらった。大半のお客さんは残念そうに列を離れたが、中には丈満をぶつける方もおり、ある年配のご夫婦に「沖縄そばを楽しみにしていたのにお前たちは詰めが甘い」とお叱りを受けた時は先生と私は思わず顔を見あわせて苦笑するしかなかった。

今年もキジムナーフェスタの暑い季節がやってきた。例年同様、パルミラ通りやパークアベニューを通るときには、いつもの様に照れた笑顔の先生に出会う気がしてならない。先生が帰郷してお父様の後を継いで地域医療を始めた時期は、地元住民自らの手でコザの再活性化事業に取り組み始めた時期と重なっていた。

そのような中で先生はコザ漫遊国議長に就任し、仲間と共に漫遊国ブログから飾らない言葉でコザの魅力を発信し続けてきた。それはいつしか全国の読者の心を掴んで、コザの魅力にとり憑かれたりピーターや、初めてコザを訪ねる新たなファンの姿は今も後を絶たない。またコザに関わる先生のエッセイが琉球新報夕刊コラム“南風“に多数掲載された。

エッセイには、時にさり気ない厳しい指摘もあったが、いつでも街への温かい思いやりと力強い声援に溢れていた。私もまた、エッセイを読み返すたびに、先生からエールを送っていただいている気持ちになる。

源河先生との出会い

鈴木 雅 子

(元コザクラ店主／コザ漫遊国閣僚／コザインフォメーションセンター)

2005年、沖縄市のコザ・パルミラ通りでカフェ（コザクラ）を開くために、台車に荷物を載せてガラガラ行き来していると、通りがかりの方が手伝ってくれて大いに助かりました。この方がだれなのか、私は全く知らなかったのですが、後日、お医者さん、しかも東大出のすごい先生！と聞いて、蒼くなったのは、知らぬを幸いに、こき使ったからです……。

その後、源河先生は、私に囲碁の魅力を教えようと躍起になられたもののあえなく失敗。なにしろ私は、頭を使うよりゴロ寝が良いというタイプ。私の横着ぶりにやっと気づいた先生は、以後、囲碁に誘うことはやめられましたが、懲りずにお付き。いただきました。

そして、デイゴホテルの宮城社長、コザの八百屋さんなど地域を愛する皆さんに、ITのプロであるコザアッチャー大野さんが協力して、2006年7月、源河先生を議長に「コザ漫遊国」が誕生しました。

当時は、個人が気軽に情報発信できるブログが普及しだした時期です。これを活用して「今日のコザで何がある、というような日常を発信することでコザを知ってもらおう」という趣旨でスタートした地道な活動でしたが、岡山県の倉、音楽祭への参加など県外との新たな交流も生まれました。

そして2009年8月、市民と行政が協働する沖縄市中心市街地情報発信支援事業「コザインフォメーションセンター」の立ち上げにつながったのです。同センターは、沖縄市の地域資源を活用した事業にとり組んでいます。具体的には、沖縄市でしか出来ない修学旅行のプログラム開発や個人旅行のサポート、地域イベントのお手伝いなどであり、その流れから、地域の魅力を再発見する沖縄チャンプルー、覧会など、地域の垣根を越えて幅広い交流が拡がりつつあります。

源河先生がご逝去されて1年。そのわずか1年で拡散型のツイッターや世界と繋がるフェイスブックの台頭など、情報発信の在り方も変化していますが、ブログツールに馴染んだ人が多い沖縄市は、他市町村よりも早く、臨機応変に対処しているようです。

源河先生が健在だったある夜、パークアベニューのバーで珍しく酒に酔った先生が若い人たちをけしかけました。「思いっきりやりなさい。コザのオジサンたちがついている。頑張る人たちをガードして応援するのが、私たちの仕事なんだから！」

私もまた、先生がまいた種をしっかりと育てて、次の世代に渡す役割を果たしていきたいと思います。

源河先生のこと

わうけいさお

(コザ漫遊国閣僚／沖縄サブカルチャー作家)

初めて源河先生と会ったのは2005年、パルミラ通りにあったバー・コザクラ（現在メメント）だったと記憶している。何度かその店に飲みに行っているうちに常連さんたちと顔なじみになり少しずつ会話を交わすようになる。

源河先生もそんな一人だった。分厚い眼鏡に地味で真面目そうな風貌が印象に残っている。平日に来るときは大体黒豆茶を注文していた。

私はその年に地元の出版社から「なんだこりゃ～沖縄」という本を出していた。本の内容は、マンガ・映像作品・本・雑誌等に見る変な描かれ方をした沖縄について調べたもので、はっきり言ってアホな内容のバカ本である。そんな本にも関わらず源河先生は購入して万さった。バカ本の中で取り上げているマンガや映画に関して、真面目な顔で質問してくる先生に戸惑いを感じた事も数回あった。

初めて源河先生の病院に行った時、待室での本棚に置かれた私の本を発見したときはなんだか丈思議な気分だった。以後、私の母親・兄弟・親戚・親の友人等を先生の病院に紹介した。全員に好評だった。

このように、源河先生の思い出はたくさんあるが、忘れられないのがオキナワンロックの重鎮の一人チビさんと同級生で、幼い頃相撲をとったことがあるエピソード。

先生曰く。「彼は右四つが得意だった」

地域の活性化、地域医療について常に真剣に考えていた先生。

英語中国語韓国語に堪能だった先生。囲碁が得意だった先生。

コザクラのカウンターで黒豆茶を静かに飲んでいた先生。

先生の突然の訃報は大変ショックで残念であるが、先生と接した数年間は、オタクネタの研究が専門のアホな私にとっても大変貴重な時間だったと思う。

謙虚さという美德

仲 田 健

(コザ漫遊国閣僚／沖縄市銀天街青年部長)

すみません。すみません。

源河先生の声が何度も聞こえてきます。皆の尊敬する我らがコザの東大出のお医者さん。その方が、何十人ものお客さん一人一人に謝っています。その顔は、なぜか嬉しそう。こんな状況を想像できるでしょうか？

2008年2月。僕らコザ漫遊国メンバー総勢10人は、源河先生をリーダーに、岡山県で毎年開催されている倉敷音楽祭に参加して、コザ屋台ブースを設けることになりました。本題からそれるので、参加までのいきさつ、当日の内容については、詳しく書きませんが、イベント開始と同時に、コザ屋台ブースの前に

は、倉.のたくさんのお客さんが来てくださり、長蛇の列をつくりました。

その数は、僕らの予想をはるかにこえ、沖縄人気と倉敷の人口の規模の大きさを感じました。準備した沖縄そばは、あっという間に売り切れてしまいました。それでも、やってくるお客さん一人一人に源河先生が丁寧にお詫びしています。

とにかく、源河先生は、イベント開催中、ずっと謝りっぱなしでした。本当は、一番えらいはずの漫遊国議長が、一転して、謝り係になっていました。そばコーナー担当の僕は、申し訳ない気持ちでいましたが、笑いをこらえていたのも事実です。

もう、かなわない願いとなってしまうかもしれませんが、また倉敷にみんなで行って、嬉しそうに謝る源河先生のお顔を拝見できればと今でも思う時があります。

最後までコザを愛し、街づくりに熱心だった源河先生。あの源河先生の偉ぶらない謙虚さは、僕らコザの人間には、とくに学ぶべき大切なことなのかもしれません。源河先生、これからも先生の遺志を継いで、コザのために頑張りますので、天国から.援よろしくお祈いします。

源河茂を悼む

仲井間憲英

(同級生／なかいま耳鼻咽喉科院長)

早いもので彼の突然の.去から一年が経とうとしている。彼とはコザ小学校以来だから、もう五十余年のつきあいになる。その頃のおぼろげな記憶を手繰ってみる。

小学校時代の彼は優秀だったが、特に傑出した成績ではなかったと思う。ところが、中学校に入学する頃から急激に成績が向.した。その訳を尋ねた。すると彼は成績優秀で生徒会長である兄へのコンプレックスが原動力だと答えた。それ以後の彼の努力は凄まじかった。

結果、沖縄一の成績でコザ高校に合格し、さらに大学受験（当時は国費）でも沖縄県でトップの成績を納め、東京大学医学部に入学した。夏休みや正月休みに、彼が帰沖した際は、いろいろ語り.った。私と違って博学多才な彼は会うたびごとに、学問することの意義を熱っぽく話してくれた。

高校を卒業以来、沖縄を離れて数十年、一念発起した彼は、単身、故郷である沖縄に戻り、開業した。郷里に戻った彼は一心丈乱に、医業、医師会活動、地域活性化のための活動等に東奔西走していた。同級生模合いを月一回、開催しているのだが、その席で彼が「豚で食べられないのは鳴き声だけだが、皆様、豚の舌を食べたことがありますか？」と尋ねた。皆が「食べたことがない」と答えると、「次回（来月）の模合いは餃子で豚舌を食べよう。」と言った得意満面な彼の顔が今でも浮かぶ。

残念なことに彼と一緒に豚舌を食べることはなかった。

読谷村運動広場で開催された四・二五県民大会に彼に誘われて一緒に参加した。医師会のマイクロバスで会場に向かったが、大渋滞で途中からバスを降りて徒歩で目指した。歩きながら語りあった。「市立図書館を地域活性のために、コリンザにぜひ移転させるべきだ。」と熱く語っていたことが印象に残っている。彼の希望通りになることを願う。

彼の類無い才能、実行力、貢献力はまだまだ必要であった。その彼が志半ばで.かれるとは夢にも思わなかったし、嘸かし、無念だったと思う。もしかしたら、向こうで、此で、やり残したことの続きを、持ち前の勤勉さと忍耐力で頑張っているかも……。

彼が去って益々、存在の大きさや偉大さを痛切に感じる。ただ私にとって彼と同時期に共に過ごせたことは、この、ない幸せであった。私も天国で彼と胸を張って再会できるように残りの人生を悔いのないように精一杯生きたいと思う。それまで今暫く待っていてくれ。

茂との思い出

屋 良 朝 健

(同級生／沖縄市役所)

茂と私は縁戚関係にあり、互いに祖母に抱かれた1歩頃の写真がある。二人とも石川市で生まれ、コザ幼稚園入園以来、小・中・高と同じ学校で、共に学び過ごしてきた。茂は、高校・大学とも県内1番の成績で入学し、東大医学部に進学した秀才で、私達同期の誇りでもあった。

幼稚園入園時の初日は、茂とは別のクラスであったが、なぜか、翌日から同じクラスになった。祖母から「茂ちゃんが学校に行くのを嫌がっているので、一緒に登校して」と言われていたので、そのことが原因だったのかなと思う。

低学年の頃、近くの野原でトンボやセミ捕りをして遊んだ。その頃の茂は、成績が特に良かったわけではないが、授業では「なぜ?」「どうして?」と納得いくまで質問をして、担任の先生が回答に窮していたことを、今でも鮮明に覚えている。また、なぞなぞが、意で、自分で考えたものをよく披露したので、小学1年生の時のあだ名は「なぞなぞ博士」であった。

当時から、茂の探究心とスケールの大きさにはオーラを感じ、茂には絶対に勝てないと思った。高学年になると、茂は、勉強も頑張っていたが、運動も好きで、野球、鉄棒、相撲、逆立歩き等、友達同士で競い、日が暮れるまで一緒に遊んだ。茂は、中学入学と同時に東大医学部を目指し、その後は、勉強一筋になっていった。中学・高校時代の成績は他を全く寄せ付けないほど抜きんでており、勉強している間は、机に足をくくりつけトイレ以外は離れないとか、眠くなると額にサロメチールを塗る等、茂の秀才ぶりと勉強に対する姿勢は、後年までコザ中学校の語り草になったようだ。

一方、あまりにも優秀すぎて、近寄りがたい存在と見られていたが、不良グループにも決して屈しない正義感と、誰にでも分け隔てなく真摯な態度で接していたので、茂のことを悪く言う人はいなかった。

また、勉強を教えるのも上手だった。中1の時、茂がクラスメートの家で試験勉強をするとのことで私にも誘いがあり、一緒に勉強したことがある。理科の圧力と比重について、わずか3時間ほどであったが、定義等基礎を重視する勉強法と学問に対する姿勢を目の当たりにし、大いに刺激を受けたものである。その日を境に私の成績が伸びたのも茂のお陰だと本当に感謝している。

このように、私は、茂から語り尽くせない程、多くのことを学び、影響を受け、茂の発する言葉の一つ一つに志の高さと信頼を覚えたものだ。大学入学後は、茂がお盆と正月に規制する際、互いの近況報告をするぐらいであったが、コザで開院してからは、同級生模合や市のイベント等、会う機会も多くなった。模合では、茂がコザの活性化への強い思いとともに、若さを保ち、長生きするために普段から食事等に気を付けていることを、熱っぽく語っていたので、仲間より先に逝ってしまったことが、信じられないし、本当に残念である。

最後に、“茂らしい”エピソードを紹介し、本の出版を企画してくださった花城先生をはじめ、コザ漫遊国の皆様に茂を誇りに思う友達として、感謝を申し上げます。

1 小学1年生の時、学校の検便で鶏の糞を提出した。

2 高校 3 年生の時、化学のイオン化傾向の授業で、ごく微量のナトリウムを水に入れると、ナトリウムはネズミ花火のように激しく動き廻り、爆発した。その反応に興味を示した茂は、部活（化学クラブ）で実験場所を運動場に移し、ナトリウムを丸ごと水の入ったビーカーに入れた。爆発は大きくなったが、それでも納. できなかった茂は、皆がためらう中、今度は、イオン化傾向の一番高いカリウムで試したのだ。すると、爆発とともに、ビーカーの底が抜けたのであった。

また、水素の実験において、発生した水素は、水を通して捕集（水上置換）することを学んだが、探究心の強い茂は、水を通さないで直接捕集を試みた。すると、実験室中に響く大きな爆発音とともに、ガラス片が飛び散った。幸い、二人とも無事で良かったが、顧問の先生には、こっぴどく怒られたことを覚えている。好奇心が旺盛な茂の実験につきあうのは、遠慮したいものだ。

3 昭和 47 年頃、自動車の学科試験を一緒に、験した際、試験終了後、試験管が、格者の名前を読み、げたが、茂は呼ばれなかった。その結果に茂は動じる様子もなく、「おかしい」と言うなり事務室に確認に行くと、採点ミスで実は合格とのことであった。試験に関する、彼の自信と余裕に改めて敬服した次第である。

源河先生を偲んで

照 屋 幹 夫

（コザ高校後輩／NPO コザまち社中理事長／コザサポーターズクラブ世話人）

源河茂先輩との出会いは、1962 年、私がコザ小学校 2 年生のときだからかれこれ 50 年近く前のことである。当時から秀才の呼び声高く、いろいろなエピソードが豊富な人でありましたが、私が目撃した茂先輩はいつも走っていた印象がある。あの頃、現在の一番街の中に川端書店があり、家は近いはずなのに走って店に入って来て、ノートとか鉛筆などの文房具を買い 5 分も経たないうちにまた、走って帰っていく姿を何度も見ました。

また、茂先輩の弟で修君と私は同級生。たまたま同じクラスになり友達数人と修君の家に遊びに行くことになって、勉強部屋にあげてもらい、扇風機を前にして雑談をしていた時、急に部屋に入ってきて「時間がもったいない、家に帰って勉強しなさい」といわれびっくりした記憶が今も残っています。

茂先輩の中学校時代のエピソードもいろいろな方から聞かされました。授業が終わって清掃当番のとき外ボウキで掃き掃除をしていたが単語. に夢中になるあまり、雨が降ってきたのに気がつかず濡れながら掃除をしていたとか、音楽とか体育などの教科も評価 5 が欲しくて風邪を引きながらも頑張っていたなど、話題に事欠かない真面目を地でいく人物でした。

高校に進学してからも数々の伝説を創った人でした。当時、国費という制度があり大学を目指す学生の多くが本土の国立大学を目指しました。一浪当然。二浪当たり前の時代、現役で東大を目指す茂先輩は、試験の面接でも東京大学にしか行かないということを面接官に訴えたと言われました。私たち凡人からは雲の上の人でした。また、それを実現したことに、自分は到底無理なことだけ茂先輩だと当たり前にな納. したし、近くにそのような先輩がいることを誇りに思いました。

大学を卒業して東京で医者になったと聞きました。やっぱり第一線で活躍して欲しかったし、それができる人だとの思いもあり、いつしか忘れかけていた矢先、沖縄市に戻ってきていると知らされ、丈思議な気持ちになりました。

新たな接点ができたのは平成 18 年頃のことです。厚生労働省の雇用創出事業である「パッケージ事業」で人材育成事業を展開している頃、たまたま立ち寄った居酒屋で、まちづくりについて、熱い思いを語る茂先輩がいて「事業のカリキュラムに韓国語と中国語を採用してくれ」という。折角地域に人材がいるのに

活用しないのはもったいないというのです。

事実、茂先輩はセリカの店に通いながらいつの間にか韓国語をボソボソと話したり、キャサリンで食事をしながら中国語について一生懸命会話をしたりして、独学で語学についてもすごいスピードでマスターする、やはり頭の構造が世間一般とはちがうのだと実感しました。

また、ある時中央パークアベニューのインド屋に呼ばれて、囲碁を打とうということになりました。しかも店の前に碁盤をだして打つことになりましたが、なぜインド屋の店で囲碁なのかよくわからなかったのですが、何回か対局させてもらっている内に「これもコザらしいといえばコザらしい」と思えてきて、月に1回か2回碁盤を囲むのがとても楽しみになりました。

マイヒーローであり、コザの伝説の人である茂先輩が急逝されたことは、ほんとに、急なことでまだ気持ちの整理ができてない状態ではありますが、学生のころ読んだ司馬遼太郎の「花神」に出てくる大村益次郎とイメージがダブっています。私にとって源河茂先輩は、コザの花咲か爺さんです。物事に対する姿勢、地域に対する想い、深い洞察力、沢山のことを学ばせて頂きました。

私たち後輩も、茂先輩の生き様を手本にこれからのまちづくりに活かして行きたいと思います。本当にありがとうございました。

先輩を偲ぶ

屋 良 保

(コザ高校後輩／沖縄市役所)

《高校1年生の時》

1. 朝の登校時に、胡屋のバス停で先輩が慌ただしく駆け寄り「バスを待つ時間がもったいないので、タクシーで行こう。皆で割勘するとバス運賃と同じだよ。」と言った。

先輩は、1分1秒を大切に、創出した時間は勉学に充てていたようである。その日から、先輩とバス停で会うと、我等下級生はタクシーの割勘要員となった。

2. 体育の時間に先生が言った。「君等の先輩に体育以外はオール5の秀才がいるが、体育で5の評価をとるための相談があった」。そこで先生は「私の授業で実施中の棒高跳びで指定する高さのバーをクリアできたら5の評価を三えても良い」と返答したという。先輩は、猛特訓し5の評価を獲得した。

3. 大学進学の際、受験対策として全琉模試が度々実施され、先輩は常に県内一位の座を確保していた。そして、国費留学生として現役で東京大学医学部へ進学した。

《大学1年次の時》

1. 学費と生活費を稼ぐため、中の町社交街のクラブでバーテンダーのアルバイトをした。ゴールデンウィーク期間中にママさん目当てで東京大学医学部教授が毎年クラブを訪れていた。その教授は先輩の事を知っており、来店する度に近況を教えてくれた。

《市役所勤務時》

1. 7年前、先輩が東京から戻り医院を開設した。地元では、伝説の秀才がコザの町医者として戻ってきたと大歓迎した。因みに、私も月1回程、同医院を訪れ処方箋を頂いていた。

2. 5年前、地域活性化を目的として発足したコザ漫遊国の議長に先輩が就任した。同ブログポータルは順調にアクセス数を伸ばし、コザの情報を国内はもとより全世界に発信している。

3. 先輩が言った。沖縄市は国際文化観光都市を標榜しているのだから、外国語を地元で広げよう。それ

から、韓国語同好会、中国語同好会が先輩主催で開催され、多くの方が外国語を学び、外国人との交流を始めた。先輩は、日本語が通用するのにも拘わらず英語圏、中国語圏等の外国出身者と、その国の言語で話すことを心掛けていた。

4. 沖縄は、プロ野球キャンプ地のメッカだが、キャンプ期間中、沖縄市内でも広島東洋カープ、横浜ベイスターズ二軍選手との遭遇機会が多い。先輩は、スカウトや留学でキャンプに参加している中国や台湾の選手を度々台湾料理店に待し、中国語の実践を通じ交流を深めていた。

5. 沖縄市の中心市街地には空き店舗が多い。先輩は、空き店舗のオーナーと度々会って、建物を遊休化するより低廉な家賃、時には無償で提供することを訴えていた。

以上の記述は先輩との思い出の一部。先輩の名前は源河茂。2010年8月7日、親族や我々に前ぶれも断りもなく、心の準備さえ与えず勝手に逝ってしまいました。

私は、人間ドックで再検の通知が来るたびに主治医の先輩に診て貰い、「体重を落としましょう、朝食は玄米がゆを食べましょう、付き合いのお酒は控えましょう」などと優しく、しかし執拗に説いていただきました。暴飲暴食なしで酒々、煙草は吸わずの健康体に見えた先輩が、先に逝ってしまったことについては大いに疑問を抱いているし、納得できないで今日を迎えていることも事実です。

今だからこそ言えますが、先輩の訃報を聞いてから暫くは喪失感と共にやるせない憤りの念を感じておりました。なぜなら先輩は昔から目標を持ったり、趣味の囲碁でみせたようにのめり込むと脇目もふらず没頭する性質ではあったにせよ、町医者としてのスペシャリストが、自己診断をおろそかにしたのは医者の丈養生そのものではないかと。

あれから一年が経過いたしました。日々仕事に追われる生活に変わりはないのですが、最近冷静に考え、先輩も含め私の周りから先に逝った大切な方々は、人生を早めに全うしたが、の天の配慮か采配だと思いうようにいたしました。それでも、未熟な私は、健康についての自己管理の仕方がわからず当惑いたしております。

先輩、時にはあの世からサインを送ってください。

突然の訃報

広島原爆記念日を翌日に控えた今年の八月五日、私は広島市の平和記念公園にいた。午後4時ごろ弟の修から電話が入り、「茂が、勤め先の嶺井病院で倒れ、危篤だ」と告げられ、全身に激震が走った。

私は、八・六広島集会での意見発表を終えるとすぐに中座し、妻と帰路についた。やっとの思いで嶺井病院にたどり着くと、茂の妻、息子たち、兄弟夫婦、親戚の方々がベッドに横たわっている茂を心配そうに見守っていた。すでに意識はなく、脳出血した頭には包帯が巻かれ、息は荒荒しく、脈拍を示す機器がピッピッピッと音を立てていた。長い昏睡状態が続き、脈拍が徐々に落ちていった。

八月七日午前11時29分、家族の切なる願いもむなしく、茂は静かに息をひきとった。あまりにも突然で、早すぎる茂の死去に愕然とし、にわかには信じられないような思いにかられた。つい先日まで元気だったのに……、変わり果てた姿となってしまい、残念無念としか言いようがなかった。

茂の親孝行

「親より先に、くのは親丈孝」とも言われるが、茂は短い生涯のなかで十分に親孝行を果たした。今から31年前の1980年10月20日、父・朝康が突然倒れ、まったく歩けなくなった。CT検査の結果、慢性硬膜下血腫であると診断された。軽い脳内出血があり、それがうっ血していた。

脳外科医になった29才の茂が東京から飛んできて、中部病院で父の脳手術をおこなった。うっ血した血液を100CCばかり取りだす比較的軽い手術であった。

手術後、わずか数時間もするとまったく歩けなくなっていた父がスタスタと歩き出し、家族の者をびっくりさせた。頭に包帯をまいた父と家族全員は喜びの涙を流した。父は、「茂に親孝行させられたよ」と苦笑いしていた。父が71才の時であった。

その後、後遺症もなく健康を回復した父は、仕事に復帰し83才まで源河医院をつづけ90才でその生涯を終えた。

茂の親孝行は、もう一つ。

2009年11月28日、今度は母が突然武行困難となり、そのまま寝たきりになるのではと心配された。美里整形外科で診断の結果、足の付け根の骨が弱くなり、骨粗しょう症になっていることがわかった。茂が、母の足に骨を丈夫にする注射を週一回おこない、毎日、薬と栄養剤を与えた。母は、2~3ヶ月もすると立つことができるようになり、半年もすると1人で歩けるようになった。茂は、母の健康回復のために細心の注意を払ってくれた。

茂は、父と母の命を救い、健康を回復させた。りっぱな親孝行であった。茂は、父が建てた源河医院を改造して新しい源河医院を開設した。残念なことに、源河医院開設7年目を迎えたところであった。

地域の人たちとともに

茂は、本職の医療だけでなく地域のみなさん、友人のみなさんとともに街づくり、地域活性化のために奮闘した。また、琉球歴史や英語、中国語、韓国語の研鑽に励んでいた。

茂は、頭でっかちで、々理屈っぽいところがあったが、地域のみなさん、友人のみなさんと親しく交流するなかで性格もだんだん丸くなってきたと感じられるようになった。

茂は、勉学に励み、頑張るところは稀にみる才能の持ち主であった。これからもっと本格的に活躍すると

ころであったが、志半ばであの世に逝ってしまった。本人にとってもさぞかし残念で、悔しい思いであっただろう。

最後になりましたが、このような追悼文集を編纂していただいた、コザ漫遊国のみなさん、友人のみなさんに心から感謝申し上げます。

(

長

兄

源河朝陽)

語り続けるために

源河茂先生一周忌に向けて、思い出文集出版を企画して1年、その間多くの皆様の温かいご協力を経てようやく出版に至りました。これも源河茂先生のお人柄によるものとあらためて感じています。

文集編纂に当たり、夕刊コラム“南風”の記事を提供して頂いた琉球新報社、また原稿をお寄せ頂いたご友人の仲井間憲英、屋良朝健、照屋幹夫、屋良保、長兄・源河朝陽の各氏、貴重な写真や情報を提供して頂いた屋良朝健氏、島袋芳敬沖縄市副市長、奥様の洋子様、その他出版に当たりご協力頂いた多くの地域の皆様に深く感謝申し上げます。

コザ・インフォメーションセンターの多忙な業務の間、編集から雑務まで精力的にお手伝いいただきました野口亜紀様、古田和江様、正木ひかる様、また源河茂先生の素顔を語っていただき、御家族との調整にご尽力頂きました弟の朝治様にはあらためて感謝申し上げます。

源河茂先生のエッセイ集には故郷へ注がれる深い愛情と共に、帰郷後6年余のコザの躍動が記されています。この文集を読み返すことによって、ありし日の源河茂先生を偲び、その活躍がいつまでも語り伝えられんことを願ってやみません。

平成23年9月編集委員長 花城可雅